

チビヒメヒラタホソカタムシ，130年ぶり再発見の顛末記

青木淳一

〒106-0031 東京都港区西麻布 3-8-12

Rediscovery of “*Cicones minimus* Sharp” 130 years after the original description

Jun-ichi AOKI

Abstract: *Microsicus minimus* (Sharp, 1885) was rediscovered now 130 years after original description. The adults were collected in Oita Prefecture close to Kumamoto Prefecture (the type locality). Morphological differences between *M. minimus* and a closely related species, *M. niveus* (Sharp), were shown by some figures and table for comparison.

正体不明の種

チビヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus minimus* (原記載では *Cicones minimus* Sharp, 1885) は、熊本県の湯山で G. Lewis が 1881 年に採集したただ 1 頭の標本に基づいて、1885 年に D. Sharp によって記載されたものである。しかし、その後採集された記録を知らない。原色日本甲虫図鑑 (III) の中では図も解説もないが、検索表の中だけに取り込まれていて、それによると、上翅は黒褐色の地に 3 対の暗赤色紋が会合線と平行に並び、体長 1.5 mm などの特徴があり、九州に分布することがわかる (佐々治, 1985)。これはその後日本で採集された標本に基づいたものではなく、Sharp (1885) の原記載によるものと思われる。拙著「ホソカタムシの誘惑」(青木, 2009b) でも日本産ホソカタムシのリストの前段において「Sharp (1885) の原記載以来採集記録がはっきりせず標本を見ることができなかったチビヒメヒラタホソカタムシ *Synchita minima* (Sharp) はこのリストから除外されている」と記してある。その後出版された日本産モンヒメヒラタホソカタムシ属をまとめた報文 (青木, 2011) でも、拙著「日本産ホソカタムシ類図説」(青木, 2012) でも、本種については全く触れていない。なお、「図鑑に載っていない日本産ホソカタムシ」(青木, 2009a) の 15 頁の図 18 の説明にある“チビヒメヒラタホソカタムシ”はケブカヒメヒラタホソカタムシの間違いである。以上のことからわかるように、チビヒメヒラタホソカタムシは現在まで全く正体不明の種として扱われてきたのである。

Sharpによる原記載

では、チビヒメヒラタホソカタムシとは、どのような特徴をもった種なのであろうか。参考までに Sharp (1885) の原記載を翻訳すると、以下のよ

うになる。「触角は短く、黒い。前胸背は著しく横長、側縁はやや丸みを帯び、前角は顕著でなく、表面はくすみ、数少ない灰色がかった毛を生じ、密に並んで生じた白色毛からなる短い房を持つ。上翅はくすみ、うす墨色、各翅は 3 個のうすぼんやりした赤い斑紋が会合線と平行に並び、多数の色の異なる細めの毛によってまばらに覆われているように見える。更に直立した白毛の列を伴う。脚はかぼそく、汚赤色、腿節は他節より色が濃い。体長 1.5 mm。僅かに 1 頭が得られたのみであるが、*C. niveus* (注：クロモンヒメヒラタホソカタムシ) とは別の種であると思う。上翅の黒っぽい *C. minimus* は *C. niveus* の変種である可能性もある。しかし、黒い触角、短く膨隆した体形はおそらく固定された特徴であろう」。色彩に関してみると、触角が黒く、脚が汚赤色である点で、触角も脚も黄色っぽいクロモンヒメヒラタホソカタムシとは異なっている。

福井県からの記録は本物か

さて、原記載以来はじめての採集記録は福井県からであった。井上・佐々治 (1998) によれば、「福井県から新しく記録される甲虫類」と題した報文の中で、チビヒメヒラタホソカタムシは南条郡今庄町板取で 1994 年 6 月 20 日に 1 頭が井上によって採集され、「これは 2 頭目の採集記録であり、本州新記録である」と述べられている。筆者は早速、2009 年に採集者の井上重紀氏に連絡し、その標本の所在を尋ねたが、井上氏の手元にはなく、その後九州大学および北海道大学にも連絡を取ったが本種の標本は保管されていなかった。そこで、井上氏にお願いして、2009 年 5 月 28 日に採集地点の板取へ案内していただき、採集を試みたが無駄に終わった。その後も井上氏によって探索が続けら

れたが、いまだに採集されていない。結局のところ、採集記録は公表されているものの、標本が見当たらず確かめようがない。2頭目の採集地が原産地の熊本県からはるかに離れた地点（福井県）であることを考えると、本州に広く分布し、形態がよく似たクロモンヒメヒラタホソカタムシの小型濃色個体の見間違いである可能性が高い。

チビヒメヒラタホソカタムシらしき種の発見

こうして、チビヒメヒラタホソカタムシの正体が見つからないまま、迷宮入りかと思われた矢先、どうやら本物のチビヒメヒラタホソカタムシと思われる虫が大分県で発見された。発見したのは私ではなく、堤内雄二氏（大分県臼杵市在住）、三宅武氏（大分県由布市在住）、佐々木茂美氏（大分県日田市在住）の三人の方々の連携プレイによるお手柄である。最初に発見したのは堤内雄二氏で、採集された場所は大分県豊後大野市清川町の御嶽神社で、生息していたのは御嶽山頂部斜面のアカガシ・コジイ林の中のアカガシ枯死1年余りの高木で、根元から2.5 mあたりまでキクイムシの脱糞飛孔が見られた枯れ木であり、これにスプレーイングをして4頭を得た。その情報を得た三宅武氏はすぐに現地へ赴き、同じ場所で3頭を採集した。ほぼ同じ時期に佐々木茂美氏は別の場所、大分県日田市西有田坂本原のクヌギの大木で夏場は樹液が多量に出ていた木にスプレーイングをして2頭を得た。やはり、多くのキクイムシの坑道らしき孔があいていたと言う。さっそく三宅氏にみせたところ、同じ種であるとの回答を得た。結局、三人の方々によって平成24年10月に計9頭が採集されたのである。それらの標本の一部はすぐに筆者の手に送られてきた。

大分県で採集された標本を手にして眺めているうちに、なんとかして自分でも本種を採集してみたいと言う衝動が沸き起こってきて、すぐに旅支度をして羽田空港へ向かった。私のように年寄りになると「当日シルバー」という格安の航空券があって、搭乗日当日に空港へ行って空席のある便があればすぐに乗れるのである。日本全国どこへ行っても片道12,170円である。年金暮らしの虫屋には、まことにありがたい。幸い、第二希望の便に空席があって、大分空港に到着。あらかじめ発見者の三宅さんに打ち明けて案内を頼んでおけばよかったかなと気になったが、突然迷惑をかけるのも気が引け、なんとが自力で採集しようと決心した。空港でレンタカーを借り走る約80キロ、ようやく目的地の御嶽神社に着いた。参道の石段

を登っていくと右側の斜面にアカガシやウラジロガシの大木があり、枯れかかったり立ち枯れているものもある。「これにちがいない」と見当をつけてスプレー式採集を開始する。しかし、ノコギリホソカタムシ、ダルマチビホソカタムシ、ツヤケシヒメホソカタムシ、ヨコモンヒメホソカタムシ、ホソマダラホソカタムシは採集できたものの、肝腎のチビヒメヒラタホソカタムシらしきものの姿は一向に現れない。ほぼ半日頑張った挙句、しょんぼりとうなだれて帰途に着いたのであった。帰宅後、採集者の三宅さんに白状すると、「ハッハハハ、ダメでしたか」と愉快そうな（に聞こえた）声。

「でも、青木さん、いいとこまで行ってましたね。神社の前で引き返さずに、もうちょっと先を見渡せば目的の立ち枯れ木があったんですよ」という返事。「あーあ」と深いため息。ホソカタムシは「いい木を一本」見つけさえすれば大収穫となることはわきまえていたのだが、その一本を見過ごしたのだ。一本勝負ならず、判定負けである、やはり、地元の人に案内してもらうのが一番であることをつくづく思い知らされた結果であった。それにしても、三人の方々の行動力、大きくても体長1.5 mmくらいにしかならない微小な甲虫を見つげ出した眼力には心から敬意を表する。

チビヒメヒラタホソカタムシの再記載

今回大分県で発見された種は、あとで述べるようにもっとも近似しているクロモンヒメヒラタホソカタムシとの比較の結果、本物のチビヒメヒラタホソカタムシにほぼ間違いないと断定できた。ここに日本語ではあるが、再記載しておく。

チビヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus minimus* (Sharp, 1885)

(図1, 2, 3)

Cicones minimus Sharp, 1885: 69.

体長 1.27 ~ 1.55 mm.

小型で、ずんぐりした体形、全体に黒っぽく、脚のみがやや赤みを帯びた黒褐色。体表には黒色と白色の細長い毛と白色の滴形の幅広い毛を混生する(図1)。

頭部の前縁は弱く突出し、頭頂背面は平坦、横向きに伏した細長い毛と滴形の立毛を生じ、特に複眼の縁に沿って白色幅広い毛を列生する。複眼はやや大きく突出し、扇形の複眼毛を伴う。触角は黒に近い黒褐色、10節からなり、末節は顕著な球桿をなし、第2~4節は丸みが弱く、長方形に

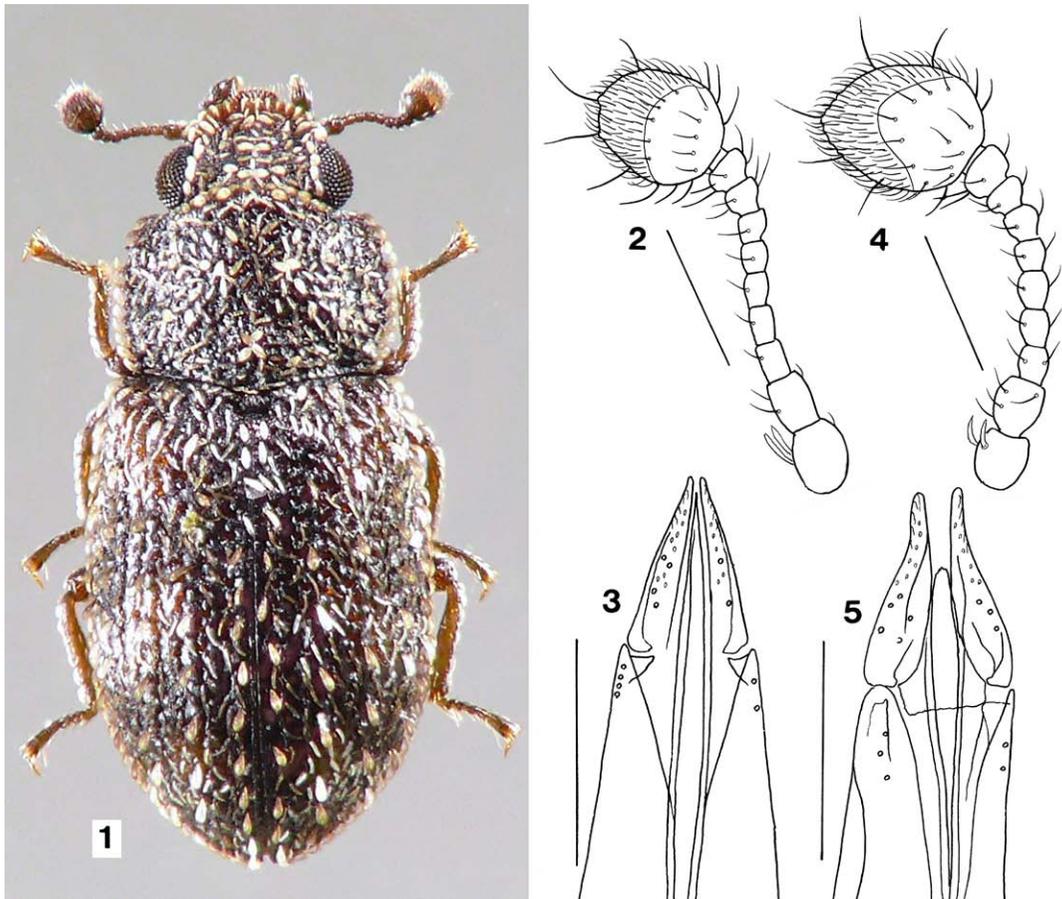


図1-5. チビヒメヒラタホソカタムシ *Microscopic minimus* (Sharp) (1-3) およびクロモンヒメヒラタホソカタムシ *Microscopic niveus* (Sharp) (4-5) . 2, 4, 触角; 3, 5, 雄交尾器の先端部 (図2-5のスケール: 0.1 mm).

近い形状となる (図2).

前胸背は明らかに横長, 幅/長さの比率は 1.33 ~ 1.41, 前縁および後縁はゆるやかに膨らみ, 前角は前方に突出することはなく, 後角は直角に近い. 側縁には 12 ~ 13 個の鋸歯が並び, 各先端に滴形の白毛を生ずる. 背面には目立った凹みはなく, 全体網目状構造.

上翅は短く, 長さ/幅の比率は 1.43 ~ 1.52, 後方に向かってわずかに膨らみ, その先で狭まって翅端は鈍く尖る. 上翅は黒色の地に暗赤褐色の不明瞭な 3 対の斑紋が並ぶ. 表面には細長く伏した毛を密生し, それに混じって滴形の幅広い白毛をまばらに生ずる.

雄交尾器は側片が細く尖り, 先端に向かってすぼまる. 中央片は更に細く尖り, その先端は側片の先端近くにまで達する (図3).

採集記録: 以下, 原産地での記録および今回の記録を地点別に示す. 第2, 第3地点での採集方法

はいずれもアースジェットによるスプレーイングである.

第1地点 (原産地): 熊本県水上村湯山, 1881年5月, G. Lewis.

第2地点: 大分県豊後大野市清川村御嶽山, 標高 601 m, 山頂部斜面のアカガシ・コジイ林内のアカガシ枯死1年余りの高木 (根元から 2.5 m あたりまでキクイムシの脱糞飛孔あり), 2012年10月7日, 3頭, 堤内雄二採集; 2012年10月9日, 1頭, 堤内雄二採集; 2102年10月11日, 1頭, 三宅武採集; 2012年10月25日, 2頭, 三宅武採集.

第3地点: 大分県日田市西有田坂本原, 標高 200 m 前後, 町はずれの里山のクヌギの大木 (夏場は多量の樹液を出す. キクイムシの坑道多数あり), 2012年10月10日, 2頭, 佐々木茂美採集; 2012年10月19日, 1頭, 佐々木茂美採集.

採集された合計9頭のうち, 3頭は筆者の手に, 他の個体はそれぞれの採集者が保管している. 第2

表1. クロモンヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus niveus* (Sharp) とチビヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus minimus* (Sharp) の区別点一覧.

	クロモンヒメヒラタホソカタムシ	チビヒメヒラタホソカタムシ
触角の色	黄褐色	黒褐色
脚の色	黄褐色	暗赤褐
前胸背中央基部の1対の円い凹み	明瞭	不明瞭
前胸背側縁の鋸歯	弱い	強い
上翅の明色斑紋	黄褐色～汚黄褐色, 明瞭	暗赤褐色, 不明瞭
上翅最内列の毛数	21～25本	13～14本
上翅最外列の毛数	31～36本	33～39本
上翅の太い毛	幅狭く先端鈍く尖る	幅広く先端が丸い
上翅の細い毛	先端鋭くとがる	先端鈍く尖る
雄交尾器の中央片	太く短い	細く長い
雄交尾器の側片	外側に反りかえる	中央にすばまる
体長	1.62～2.10 mm	1.29～1.55 mm
分布	北海道～九州	九州(熊本県・大分県)

地点の木は枯れ木であるが、第3地点の木は生木である点に注目したい。なぜなら、筆者の経験からすれば、ホソカタムシ類は完全に枯死した立ち枯れ木に最も多く生息し、生木や一部が枯れただけの木(部分枯れ)には生息しないと信じていたからである。第3地点のクヌギは生木ではあるが、樹液跡は少し枯れていたと言う。これは大変貴重な情報で、今後は部分枯れの木も注意してみなければならぬと思う。

クロモンヒメヒラタホソカタムシとの比較

チビヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus minimus* (Sharp, 1885) に最も類似した種はクロモンヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus niveus* (Sharp, 1885) である。Sharp (1885) はこの2種を同時に記載し、前者は後者の黒化型個体である可能性もあるが、やはり別種であろうと結論している。今、外形の実体顕微鏡による観察と解剖プレパラートの生物顕微鏡による観察によって両種を比較してみると、図2-5に示したような差異のほか、表1に整理されたような区別点が見出された。これにより、両種は極めてよく似ているものの、今回の比較研究によって形態的差が見出されたこと、原記載ともよく一致すること、原産地と今回の採集地が近いこ

となどから、このたび大分県下で採集されたものはチビヒメヒラタホソカタムシ *Microsicus minimus* (Sharp, 1885) と断定してよいと考えられ、ここに原記載以来の第2の採集記録として報告するものである。

最後になったが、この貴重な発見をされ、標本の一部を提供してくださった堤内雄二、三宅武、佐々木茂美の3氏に心からお礼申し上げる。

引用文献

- 青木淳一, 2009. ホソカタムシの誘惑. 日本産ホソカタムシ全種の図説. 195pp. 東海大学出版会, 秦野市.
- 青木淳一, 2011. 日本産モンヒメヒラタホソカタムシ属(新称) *Microsicus* と日本未記録種について. 神奈川虫報, (173), 1-9.
- 青木淳一, 2012. 日本産ホソカタムシ類図説. ムキヒゲホソカタムシ科・コブゴミムシダマシ科. 94pp. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 佐々治寛之, 1985. ホソカタムシ. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之(編著):原色日本甲虫図鑑(III), 保育社, 大阪. x + 500 頁.
- Sharp, D., 1885. On the Colydiidae collected by Mr. G. Lewis in Japan. J. Linn. Soc. London, 19, 58-84, pl.3.

(2012年11月20日受領, 2012年12月16日受理)